



立教大学 文学部教育学科
教授 河野哲也先生

1963年生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後、同大学院文学研究科博士課程哲学専攻修了。博士(哲学)。国立特殊教育総合研究所、防衛大学校、玉川大学を経て、2008年より現職。哲学対話の学校への出張授業やフシリテータ養成のための研修会・勉強会などを行うNPO法人「こども哲学おとな哲学アーダコーダ」副代表理事も務める。
<http://ardacoda.com/>



『こども哲学で対話力と思考力を育てる』
河出ブックス

教育現場での実践例なども紹介しながら、哲学対話を実際にどのように進めていけばいいのか、場のつくり方や授業の組み立て例など、具体的に示す。「こども哲学」としているが、高校生や大人向けでも、基本は同じなので実践に向けて参考になる。

対話授業の組み立て例

テーマ設定から3回の授業に分けて、じっくり話し合う場合	
[1回目 45分]	
● 導入(哲学対話の説明)	15分
● テーマの設定	25分
● 対話を振り返る	5分
[2回目 45分]	
● 「問い」の設定	15分
● グループディスカッション	25分
● 対話を振り返る	5分
[3回目 45分]	
● クラス全体でディスカッション	35分
● 対話を振り返る	10分

対話を哲学的に深くしていく「質問例」

意味の明確化

「～ってどういう意味ですか」「～はどう定義しますか」

理由をたずねる

「なぜですか」「どうしてそう言えるのですか」

証拠をたずねる

「そう言える証拠がありますか」「何か具体例はありますか」

真偽を確かめる

「それは本当ですか」「どうやってそれが真実だと確かめられますか」

一般化を確認する

「それはいつも当てはまりますか」「反例はないですか」

前提を問う

「その考えには何か前提があるのですか」「どうして、そういう考えが生まれるのですか」

含意を確認する

「そうだとすると、どういうことになるでしょうか」「その主張どおりだと、最終的にどうなるでしょうか」

哲学対話の授業の終わり方

哲学対話では正解がない。そのため、問いで始まった授業は、さらに別の問いで終了することが多い。そこから、調べ学習など次のステップへとつながっていくのだ。とはいえ、授業の終わりに、哲学対話の在り方そのものを生徒それぞれが振り返る時間を作り、授業の評価をすることも大切だという。

自己評価のための質問例

- 1 あなたは人の話をきちんと聞きましたか
- 2 あなたは十分に発言できましたか
- 3 あなたはたくさん考えましたか
- 4 私たちは対話に集中していましたか
- 5 私たちはテーマを掘り下げたでしょうか。よい議論ができたでしょうか
- 6 あなたは何か新しいことを学びましたか。新しい考えが浮かびましたか
- 7 対話は興味深く、楽しかったですか

クラスづくりは、最初が肝心。だからこそ、多くの先生方は、新学期とともに、アイスブレイキングやコミュニケーションゲーム、仲間づくりのレクリエーションなど、生徒同士が交流し対話できるようなさまざまなワークや機会を設けているはず。そこで、生徒同士が「対話」を深めて互いを理解していく過程が体験できる機会として、「哲学対話」に注目してみた。

「哲学対話」とは、身近なテーマや物語などを題材にして、生徒同士が自分たち自身でテーマや哲学的な問いを決め、意見を出し合ったり考えを深め合いながら対話していくもの。哲学対話の研究者で、多くの小中学校や高校で実践されている立教大学教授・河野哲也先生は、「普段行われている議論は、落としどころが決まっていたり、正解を導き出そうとしています。しかし、哲学対話は、正解のないものを、あーでもない、こーでもない話し合うもの。普段は全然しゃべらない生徒が、熱心に語ることもよくあり、

初めてご覧になる先生方は、そんな生徒の姿に驚かれます」と言う。哲学対話は1920年代にドイツで始まり、1970年代から急速に世界中に広がった哲学の教育方法。思考力を伸ばすとともに、「コミュニティをつくる」という目的をもつ。

「徹底するのは、『相手の話をしっかりと聞く』ということ。それによって、互いの考えを理解したり、違いを受け入れたり。特に、ハワイやオーストラリア、フランスなど多民族地域では、共同体としての「コミュニティづくり」を重視して実践されています」

それはまさに、新しい人間関係をつくるべく、新学期のクラスづくりにも共通するものと言えるのだ。

生徒が話したい「問い」を導き出す

「生きる」とは「人生」とは「生きている」とは「なにか大きなテーマを想像しながら、しかし哲学対話では、どんなテーマでも哲学的な対話になっていく」という。

「高校生であれば、進路や仕事をテーマにしてもいいでしょう。そこから何を話し合ってみたいか生徒に投げかけてみる。そうすると、そもそも仕事とは何か? 大学は何をするところなのか? など、いろいろな問いが出てくるはず。それらをカテゴリー分けしながら、その日に話し合いたい問いを決定していく。実は、この「問い」を出していく時間から、すでに対話が始まっています」

河野先生は、「問い」を決定するまでの時間を、たっぷりとることが重要

教師も生徒と共に「探究する」姿勢が大事

そのような場をつくるべく、フシリテーターである教師の役割。さまざまなコミュニケーションワークと同様、ここでは「教える」ということを手放す必要がある。

「教師も生徒と一緒に探究する態度が必要になります。『～なのはなぜ』

「子どもはもとから考えられるし話も大事だと河野先生。

「さらに、哲学対話の探究する姿勢は教科の中でも活かされます。理科の授業の実験など、まさに一緒に探究が可能ですし、国語の授業などでも小説を読んだ『なぜ作者はこのようにな話を書いたのだろうか?』など問にかけていく。教師が正解をもっていいのではなく、教師もわからないことをあえて生徒と一緒に探究していく。そういう姿勢でぜひ、挑戦していただければと思います」

「身近なテーマであっても、対話を続けていくうちに自ずと議論は深まり、哲学的な思考が必要なレベルに到達していきま」

小学校低学年や幼稚園児でもその一方で、高校生はなさらだ。

「哲学対話にかけられる時間の全体が10だとすると、問いを決めるまでに6くらいを費やします。そうすると、自分たちが話したいと思ったことが問いになるので、生徒は夢中になって話し始めます。時には、『何か話したいことがありますか?』とテーマ設定そのものも生徒に任せられることも可能です」

「発言できる」「環境づくり」を目指す

新学期がチャンス

新学期こそ、クラスづくりの絶好のチャンス。授業やHRで生徒が安心して発言できる環境づくりのために「哲学対話」に注目してみました。


取材文/清水由佳ライター・キャリアカウンセラー

対話の機会を通じて クラスの雰囲気をつくる

キャリアガイダンス 高校生の主体的な進路選択を応援する先生のための

Career Guidance

キャリアガイダンス 進路指導・キャリア教育の専門誌



【最新号】Vol.416 2017年2月発行

■特集
生徒の進路選択・決定力を高める進路指導とは?

【調査報告】第19回「高校の進路指導・キャリア教育に関する調査2016」
【特別対談】生徒の主体的な進路選択のために
長田 徹(文部科学省初等中等教育局 生徒指導調査官)
藤田晃之(筑波大学 人間系 教授)
【Special Interview】
なぜ進路を決定しない、できないのか。
学校・教師の役割と責任をあらためて考えてほしいのです
渡辺 三枝子(筑波大学 名誉教授)

■連載
● アクティブラーニング型授業への挑戦【番外編】
アクティブラーニング型授業研究会くまもと
● 地域課題解決型キャリア教育
銚子商業高校(千葉・県立)

『キャリアガイダンス』誌は全国の高校に贈呈しています(校長、教頭、副校長、進路指導主事先生宛に郵送)
バックナンバーの記事はすべてWEBサイトで閲覧いただけます

http://souken.shingakunet.com/career_g/